《公開シンポジウム》

体罰を考える　なぜなくならないのか

ぐんま教育文化フォーラムと群馬子どもの権利委員会共同企画シンポジウム「体罰を考える―なぜなくならないのか―」が5月18日（土）に群馬県男女共同参画センターで各界から60名の参加を得て、盛大に開催されました。群馬子どもの権利委員会代表大浦暁生さんの挨拶に続き、コーディネイターの針谷さんから、体罰を「部活固有の問題としてとらえるだけでなく、教育活動全体のなかに位置づけ議論してほしい」との提起がありました。パネラーは大学教師、高校の元教師と現職教師、それに大学生の4人。パネラーの発言を受けて会場から多数の発言があり、意見交流を深めました。パネラー発言と意見交流の要旨を報告します。

Ⅰ　パネラーからの報告

須田　章七郎さん（元県立高校教諭）

教職に就いた人であれば「体罰とか、言葉による暴力に、私は無縁です」と言い切れる人はいないのではないでしょうか。私は38年間高校現場に勤めていましたが、教員は教科指導でも、生徒指導でも、同僚教師がやることに横から口を出すということはほとんどないのです。たとえば、職員室で隣の先生が大きな声で生徒を怒鳴りつけたり、部活指導で生徒に罵詈雑言を浴びせていても同僚の立場を配慮してそこに介入することをしません。私が現職当時勤務したある学校では体罰が常態化しており、私の着任と入れ違いに転出した校長は自ら先頭に立って体罰を行使していたと同僚から聞きました。たとえば、集会の時に生徒が私語をしているとステージから下りていって生徒の胸元をつかんで皆の前で殴る。それから上履きの踵を踏んでいる生徒に後ろから近づいて蹴り上げる。そういうことが頻繁に行われていました。朝のショートホームルームに担任が教室に行っている間に、昇降口に行って運動靴とか下履きとかの踵を全部点検して、「おまえのクラスは何人踵を踏みつぶしている生徒がいる」と担任を校長室に呼んで注意するとか、そういう校長だったのです。校長自ら体罰をしていますので先生方はそれが当たり前のようになっている、そういう職場でした。また、ある朝私が出勤したときに、男子の生徒が鼻血を出して校門のコンクリートのところに正座させられていました。私はすぐに飛んでいって、指導していた生徒指導主事に「なにをやっているのだ。こんなの体罰だろう」と

叫んだのですが、生徒指導主事は「何も見ていないのに何を言うんだ」と言って受け付けません。後でその生徒に「なんで座らされたのか」と訳を聞いたところ、ワイシャツを出して自転車で校門に入ってきた時、生徒指導主事に呼び止められ、無視したところ追いかけて来てつかまえられて、殴って正座させられたとのことでした。私は職員室へ行って教頭に、「あれは体罰でしょう。直ぐにやめさせるべきだ」と言いましたが、校長には報告したようですけれど、やめさせませんでした。この生徒指導主事は後に校長になりました。

私も 30 代の頃は、書道の授業で一向に筆を持って書かない生徒がいると、早く書きなさいと怒ったりもしましたけれど、見方がちょっと変わったのは 30 代後半ぐらいで、体罰の横行しているこの高校に勤めてからです。「ああこの子たちもやっぱりいろんな環境の中で育ってきて、今日は多分筆を持って書く雰囲気にはなれないのだろうな」と、そういう思いに至った時に、「今日は書かなくてもいいよ」っていうふうに言えるようになりました。まさに子どもたちをどう見ていくのかということと、この体罰の問題は繋がってくるかなって思っています。

松本　稔さん　（県立中央中等教育学校教諭・野球部監督）

私は生徒を叩いたことがありません。自分も叩かれたことがありません。自分が嫌なことは生徒にはしないようにと思っております。私は話せば分かる生徒をずっと相手に指導してきたようなところがありますので、ここに来る意義はないのかなあなんて思いながらも、断りきれずにここに座っている次第です。私はあまり情熱だとか意欲だとかやる気だとかを持たない教員・指導者だったから叩かなかったのかもしれません。

私は体罰の場面をあまり見たことはないですが、何回かはあります。ある時、全国優勝したことのある監督さんのチームと試合をしたことがありました。途中で選手が送りバントを失敗し、ベンチ前に帰って来ましてね、いきなりパンパンとやるのですね。相手のベンチですけど、見ていて嫌だなあと思って、でもあれをやらないと勝てないのかなと思いましたけれども。私は今日の「体罰はなぜなくならないのか」というテーマに直接答えられませんので、こんな考えで指導してきたというところをお話しします。

第一に私は、指導者自身の考え方（哲学）がとても大きな要因かなと思っております。私は若い頃から「松本さんにとって高校野球は何ですか？」という質問をよくされました。「まあ遊びでしょうね。」といろいろなところで言ってきました。強制されてやっているわけでもなく、自発的にやっているし、それをすること自体が面白くてやっているわけですから、これは遊びだというふうに思っています。そして、10 年～20 年後も大事ですけれどもやっぱり今が大事だという視点をいつも頭に入れていました。「野球が好きでグラウンドに出てきた生徒たちの今日をどうやってより面白くさせようかな」とか、帰っていく時に「今日は面白かった、良かった」という思いを持って帰ってもらえないかなぁという気持ちはいつもありました。私はあまり腹を立てるほうではないです。野球はミスのスポーツですから、ミスがたくさん起こるのは当たり前です。それで部員がミスしたり上手くいかなかった時に、「私がどのようにもっと指導すればこの子はいい結果を出せたのかな」といつも振り返るようにはしています。また本当に部員のためにという部活動ができればいいなと思ってやって来ました。子どもの視点に立って、目線を下げてという部分もとても大事なことなのかなと思います。私は集団主義が好きではないので、なるべく集団主義にならないような指導を日常的に心がけています。

第二に指導者は勉強しないとダメではないかと思っております。自身は勉強しなかったので偉そうなことは言えないのですが、振り返ると、やっぱり主に大学や大学院の時に勉強したことがその基になっているという感じがします。たとえば、動機付けの問題などはスポーツ心理学を勉強すると必ず出てくるメインテーマでありますけれども、その知識があれば生徒に対して、こんな事を言葉にしたら、あるいはこんな事をしたら、もうチョット頑張ってやってくれるだろうなっていう答えが少しは出てくるような気がします。私は、バッティング練習や投手がボールを投げるのを見ていて、「おお、今の良かったね」とか、そういう話はよくします。

第三に私が大切にしている大きな柱の一つは「リーダーシップ」の理論です。九州大学の三隅教授が、「リーダーシップにおけるＰＭ理論」というのを提唱しています。私はずっとそれを柱にしてやってきました。ＰＭのＰはパフォーマンスのＰ、ＭはメインテインのＭです。つまり、業績や成績や実績を上げるために、片方では研究し勉強し努力しなければいけない。もう片方は、人間関係とか。集団を上手く維持するためこの両方を両立することが最終的には最も良い成果が出るという理屈・理論であります。投げたり打ったりすることについてはかなりうるさく生徒に言います。

第四に「心技体」の中で、私は「技術」のところをとても大事にしています。私は基本的に生徒のスカウトはしません。自然にここに集まって野球をやりたい子だけを相手にやっています。ですからやる気ある生徒の集まりなのです。そのやる気を低下させることはダメなのでそれだけはしないようにと心がけています。私が相手にした生徒がどうやったらもっと上手く投げられ、打てるかの技術指導を最も重視し、自分でも勉強しながら徹底してやってきたし、これからもやっていきたいと思っています。

小山　潤也さん（県内私立大学生）

私は今大学１年生です。ここ 4～5 年間、年に 1 か月以上は子どもと一緒に山の中でキャンプをしています。テントで寝て、同じ釜の飯を食べて、という生活をやっています。そんな中から見えてくる体罰や暴力ことをお話できればと思っています。中学校・高校を通して自分は殴られるとか、叩かれるということを経験していません。自分がキャンプ指導をしている子どもに腹が立つことは沢山あります。1 週間もキャンプをしていると、子ども同士で殴り合いのけんかが始まります。自分も 1 週間キャンプをしていると、かなりストレスがたまってきます。そうすると、子どものちょっとしたことでキレてしまいそうになることは数え切れないほどあります。私はキャンプ活動の中で、子どもに必ずナイフ 1 本を持たせます。3 歳児でも 4 歳児でも小学校 6 年生でも同じナイフを持たせて、基本的には同じことをさせます。先ず自分ではお箸を作らせます。ただ 3 歳、4 歳の子はナイフで箸を削るというのは難しいので、ナイフの使い方の真似事をしてもらったあと、違う手段で作らせます。なんでナイフを 3 歳児にも使わせるのかといったら、だいたい 3 歳児がナイフを使うと手を切るのですね。血を出します。痛いですよね。そうすると次に使うときに、その子はものすごく慎重になります。痛い思いをしているから切らないように自分なりに工夫をします。まぁその工夫の仕方が間違っている時もあるのですが、でも、一度自分で痛い思いをしている子は、恐らくそのナイフを使って人を痛い目に遭わせることはしないと、私はキャンプの活動を通して確信しています。ただ使い方を間違えると人を殺めてしまうということもきちんと伝えるのですけども、そのときに伝える伝え方や叱り方に私はすごく神経を使います。

キャンプで子どもには私たちのことを「リーダー」と呼ばせ、絶対に「先生」とは呼ばせな

いようにしています。先生ではなくてみんなのお兄さん、たまたまここにいるキャンプのお兄さんだよということでリーダーと呼ばせています。自分は子どもを叱るときに、子どもと同じ目線に立つか、子どもより目線を下げて叱るようにします。子どもが小さい子であれば膝をついて、子どもの顔の高さで叱ります。小さい子はなおさらなのですけれども、手を握って叱ります。小さい子は手を握ると自然と私の顔を見て注意を聞いてくれます。すごく不思議なのですけれど、上からの目線で見ているだけでは絶対にこっちを見てくれません。同じ目線に立って手を握ると真剣に聞いてくれます。これはなぜなのか自分でも分からないのですけど。ただ自分がなんでそういった叱り方をしたのかって考えると、過去に一参加者だった自分もリーダーからそういう叱り方をされていたのです。そうするとやっぱり、叱り方というかそういうものはだんだんと繋がっていき、次の代にも続いていくのだなと考えます。その点で、体罰にも似たようなことがあるのかなというふうに思います。たまたま自分は運のいいリーダーに出会って、正しい叱り方というか子どもに対して効果的な叱り方を身につけられたのですけれど、そのことはすごく幸運なことだなと思いました。子どもは否定されるとすごく嫌な顔をします。自分は子どもと触れ合うときに、否定的でなく肯定的な姿勢で触れ合うようにしています。

山西　哲郎さん
（立正大社会福祉学部教授）

私は３名の話を聞いて、小山さん、これはいいと思いましたね。私は今６千人の会員がいる日本体育学会会長の立場にいます。過日、この体罰・暴力問題に関する声明を出しました。私は中学・高校の時に部活をほとんどやってません。一人で走っていただけなのです。だから叱られることもないし、褒められたこともないし、親爺も忙しくて長男坊の私を放任していました。大学には、もっと運動がしたくって入ったのですが、あの頃は大学紛争の頃でしたから、先生方が学生に対して厳しく言うことはありませんでした。1960 年代の最初の頃の教員には暴力をふるう人がいましたね。恐らく東京オリンピックを境にしてそういうのが変わってきたと思います。そういう時代に私は主将を投票で決めるという非常に民主的な大学陸上部で育てられました。箱根駅伝でも、私のいた東京教育大（現筑波大）は 12～13 名のメンバーで一度も予選から落ちなかったんですよ。そのような時代を過ごしたときに、私は暴力とは無縁であったかといえば､「言葉の暴力」をふるいました。箱根駅伝の伴走での「言葉の暴力」が象徴的でした。しかし、あの頃の選手は後ろを振り返って､「先生、静かにしてください」と言いましたよ。勝利至上主義で監督・コーチは絶対的存在の今の箱根駅伝からは想像もできないでしょう。スポーツとは「気晴らし」であるとか､「人権」の一つであるとか、そういうことを、高校・大学の体育授業（実技指導）でもう少し教わっていれば、体罰には至らないでしょう。

そういうことを考えるとやはり､「言葉」ですね。言葉が僕らの世界にあんまり無い。今、大学で体育を教えていますが、学生が手ぶらで来るのには腹が立ちます。それで書かせるんですよ。書くと言葉として残りますよね。言葉、それが体育実技の一番大切なことだと私は今感じています。例えば３千年前に、ヨーロッパで伝達・伝令士が王様の言葉を次の王様に渡していったという歴史を振り返ると、身体運動と言葉とが一緒のものであることがわかります。ですから、部活動のなかで子どもたちが言葉で先生と対話ができるような間柄であれば、私はそれほど体罰は出てこないと思います。松本先生のような優れた指導者は言葉・対話を大切にしています。最後に、スポーツを公益性という観点

からとらえ、スポーツ政策を指導者・研究者が積極的に学んで社会に貢献していくことが２１世紀のスポーツの時代ではきわめて重要であることを強調しておきます。

Ⅱ　参加者からの発言・意見交流

群馬県教委学校人事課、西村指導主事の体罰実態報告によると、「昨年度の本県の体罰は小学校５７件、中学校７３件、高等学校２８件、特別支援学校１件の合計１５９件です。体罰が行われた場面は、小学校では授業中が最も多く、中学校・高等学校は部活動中が多く、体罰の態様は、小・中・高等学校とも、『平手で叩く』がもっとも多く、次に『拳で叩く』です。中学校・高等学校では部活動中に、竹刀等の道具で叩いたり、足で蹴ったりするという事案も小学校に比べて目立つ」ということです。

パネリストの再発言を含め、延べ 14名の方がフロアから発言されました。どの発言にも共通していたことは、「言葉の持つ力」を信頼し、子どもの目線に立って丁寧に、時間をかけて指導いくことが大切であるということでした。大人は自分が子どもの時に何を求めていたかを思い出し、自分がしてほしくないことは子どもにやらないと決意すれば体罰には至らないはずです。

生徒を力で抑えることによって学校内の秩序を維持していくという現実が、学校が荒れていた時代にはありました。その際に抑える側の生徒指導主事などに体育の教師が配置され、「全校の一致した厳しい指導」が求められたのでした。そういう状況の中で反論しにくい現場の実態は今もあります。だからこそ、「一人であっても会議等の場で声をあげ、議論をおこしていく必要がある」という発言がありました。

終わりに、ぐんま教育文化フォーラムの瀧口代表から「体罰を起こす土壌は根が深い。肩の力を抜いて、時間をかけてやっていきましょう」との挨拶があり、4 時間のシンポジウムの幕を閉じました。

パネリストをはじめ、意見交流に参加して議論を深めてくださった方々にコーディネイターとして心より感謝申し上げます。

（文責　コーディネイター　針谷正紀）